

幼 兒 教 育

第二十二卷
第九號

大正十一年九月十五日發行

兒童の製作

女子高師講師

中 田 俊 造

子供は如何に物を造るか、その製作に對する動機及目的が如何なる過程を取つて進歩發展するであらうか、といふことは家庭竝に學校教育上頗る興味ある問題で之等の研究は當に今日幼稚園の手法や遊戲の指導乃至小學校に於ける手工科等の教授方案の上にも有力なる根柢を與へる許りでなく、最近に至つて高潮されて來た作業教育、趣味教育等の問題に就ても重要な資料を與へるものである。

然らば斯の如き問題に就てこれ迄どれ程の研究が爲されてゐたであらうか。從來平面的な製作即ち圖畫に就てはいろいろ調査されたものがあつたのである。圖畫に於ては描くこと、即ち美なるものを造り出す働きの進歩に就て、サレト氏の様な心理方面か

ら有機的進歩に因める説明を試みた人や、ラムブレ、ヒト様の様な開化史的見地から反復説を採つた人や、レフイン、スタイン、氏や、ケルシ、エンシ、ユタイナ、氏の様に數萬人の兒童に就て頗る綿密に統計的論斷を試みたものや、スタンレー、ホル、氏などの様に年齢の發達に併せて、其の變化の特徴を調べたものや、モイマン、氏の様な心理的方面から綿密な分析的研究を試みたものなど、各種の方面からの研究があつて、直接間接に本問題の調査上有力な資料となるのである。

併しながら斯の平面的な美的製作、即ち圖畫的發表よりも更に具體的な木や、紙や、金屬などの様な材料を使つて立體的に發表した純粹な手工的發表に

就ては比較的有力な調査が甚だ少いやうに思はれる。即ち斯の方面では、ケント氏や、ルッケンス氏や、クロスウイル氏などの二三の報告以外には餘り耳にしない。殊にかゝる問題に關し、我國に於ては資料が甚だ乏しいので、圖畫的方面では此種の研究に多少縁が少いやうではあるが、富田文學士や關氏などの試みられた研究等の一二があるばかりで幼稚園の手技や、小學校の手工方面に就て、如上の紙、木材、金屬等での構成的方面に關する調査は近來保育上竝に小學校の手工科等で盛に自由製作などの鼓吹せられるに關らずまだ聞かない様である。

されば、此種の問題に就て過去の研究を總合し眞に根本的に我國兒童に適切なる研究を行ふことは頗る困難な事であるが今は唯調査の中途に於て未熟ながら今日迄得た材料や、平素の經驗に基き、ケント氏や、クロスウイル氏などの研究を参照して兒童製作の進歩に對する大體について述べることにする。

一、製作の動機と目的

凡て兒童の製作は、遊戯的本能に基ける構成的遊戯に始まるのである。思ふに遊戯は兒童に取つて最初の仕事であつて、彼等は吾人が職業を有せねばな

らぬ様に遊戯は必ず爲さねばならぬ仕事である。彼等に取つて遊戯の間ほど熱心で、且つ勤勉な時はないので、兒童生活の全部は殆ど遊戯に統合せられると云つて敢て過言ではない。而して、遊戯の状態も、その實際を見るに年齢の進むに従つて、いろ／＼な變化があるので、兒童の幼少な間は、玩具などを與へても單に之を打ちつけたり、投げたりして随分破壊的な動作もするが、漸次生長すると共に、自分で人形を造つたり、砂山を築いたり、紙片などで色々の物を造つて遊ぶやうになり、以前に比べて、餘程構成的な仕事に興味を持つやうになつて來るのである。かくて、從來の氣儘と自由意志によつて斷片的にやつて來た構成的の遊戯は、次第にその結果に心を用ふるやうになつて來ると同時に、從來の無責任な遊戯的な仕事が漸次その結果に就て、兒童相應に一種の責任を感じて來るやうになり、終にはその構成的な仕事の中に、餘程未來を慮る考へや、結果を豫想して現在に注意するが如き、計畫的な用意が現はれ、その意味が増して來るのである。かくて、兒童の單なる遊戯が漸次構成的遊戯に進みそこに作業の根柢を生む様になつて來るので、兒童生活に於ける作

業は、實に斯る時期から始められるものである。

かくて兒童の發育狀態に併せて、其の製作の動機や目的などを調べて見ると、朦げながらそこに何等かの時期を分ち得るのである。今自分の淺薄なる經驗や、從來調査研究せられてゐるものなどを併せ考へて、その主なる時期を擧げることとする。

一、模擬的發表時代

前に述べたやうに、兒童が漸次發育進歩するに伴ひ、或は家を造るとか、人形を造るとか、或は紙を切るとか、其他いろ／＼な遊戯的な仕事、即ち構成的遊戯を試みるのであるが、それ等の仕事は他人の用に供する爲や、美的表出を試みる意味ではなく、その目的たる單に興味あるものを具體的に表出するだけのことである。それは單に製作活動の樂しみ位に過ぎないのである。即ち彼等の製作の目的は、所謂美的表出や、實用的慾求に基くのではなくて、多くは無自覺的の發表に外ならないのである。

而して此の時代の特徴として、總ての事物の觀察が主觀的であること、その活動が總べて遊戯によつて統合せられて居ることである。故にともすると、始めは熱心に仕事に著手し相當に眞面目で構成的で

あるに關らず、彼等の體力や、注意の持續力が薄弱なる爲か、終には遊戯化し去ることも少くないのである。物を造る際にも、自己に興味ある部分は丁寧には表はさん事に努めるのであるが、興味のない部分や、自己に不必要な所は大膽な省略をして殆ど之を顧みないといふ風である。随つてその表出たるや、多くは甚だ不釣合で僅かに事物の特徴を表すに過ぎないのである。之を大人から見れば、全く取るに足らない拙い手際であるに關らず、彼等にこりては實に此上なく巧妙なるものゝ如く、自から千古の傑作の如く信じて少しも疑はないのである。而してかゝる時期は相當に長い間續くやうである。

更に又此の時代の製作品をその性質の上から見る時は、概して模擬的色彩の鮮明なことである。それは、彼等の製作の動機が、主として彼等が平素絶へず接觸せる父母や、兄弟や、朋友等の製作に模倣することが大部分を占めてゐることである。即ち最初の興味は物若しくは製作品に存しないのでその中心は人にあるのであるが、暗示や模倣の結果、次第に獨立的に自動的に自分で行ふやうになり、彼等の事物に對する興味は漸次主觀的に遷り、其の觀察は疎

雜より精細となり、かくて從來の單なる模擬的傾向はその影を潜めて、漸次寫實的傾向を示して來る。自分は此の時代を寫實的發表時代を名づけるのである。

一、寫實的(表現的)發表時代

前期に續いて此の時期では、總てに於て一段の進歩を現はして來るので、製作の態度も單に符調を模擬するが如きことに満足せず、成るべく實體に近よらんとする努力が著しく現はれて來る。即ち事物や模範に似せてそれに一致せんことに勉める所謂寫實的の時代である。従つて彼等の興味を中心は、過去の單なる發表や、無意味な製作活動に飽き足らないで既に成果の巧拙に留意し、娛樂的模擬的仕事が技術的要素を加へて著しく其結果に注意するやうになつて來る。かくて此期より大人の製作活動から仕事の方法様式などを模倣することに努力する様になつて來る。此の傾向は兒童によつて一定しないが、満八歳乃至十歳頃には殊に著しく表はれて來るやうである。

此の時期の特徴は、兒童の考へが主觀的から客觀的に遷らんとすることで、遊戯なども漸次眞面目な

活動に移らんとする過渡期である。概して智識の發達が旺盛な時で、工作に於ても前に述べた外に、自己の體力の及ばない事を覺り、手指のみで満足せず、道具即ち體力の補助機關を要求するに至るのである。従つて簡易なる道具に對して、吾人の豫期以上の興味を感じ、製作法の指導に於ても餘程秩序的に取扱ひ得る時期である。

製作の動機に就て見るに、前期に比べて新に或實用的目的のもとに製作を試みる事が多く、十二三歳頃では殆んど此の動機が全製作を支配すると言ふてもよい位である。而して、その實用の意味なるや、大人の見ると所謂經濟的のものでなく、多くは自己の遊戯的要求を充さんとする所から來たものである。

爾來實用の意味たる、兒童の發達に應じて各々其内容を異にしてゐる。即ち前に述べた様に、全く自己の遊戯活動の用具などを作らんとする意味の實用と、自己の身廻りの日用品即ち、筆入れ、紙挟み、寫眞立の類の如き、直接自己に必要な品を意味するものと、更に他人即ち父母兄弟友人などへ送りものとして作るものなどの場合があるのである。此の三つの内此の時期では第一第二の場合が多くの動機を支配

してゐるのである。

一、趣味的發表時代

此の期の終り頃から、音年期へと年齢の進むに伴つて製作に對する態度に著しき變化を示して來る。前時代には實物通りに作るものが多かつたが、此の時期ではそれに満足せず、それ／＼各自の目的及趣味に應じて製作に多少斟酌の跡を示す様になつて來る。即ち自然物の模倣や示範のみに満足せず、より以上の或る標準に照して製作を試みようとする傾向を示して來る。即ち此の時期では技術に留意し之に苦心を拂ふことは勿論、事物本來の性質乃至材料の選擇等各方面に心を配つてその製作は全然工藝的となり、意匠考案の上に著しく美術的色彩を帯びて來るのである。

この期の特徴は兒童の考へが第一期の主觀的な時代や、第二期の主觀より客觀に移らんとするのに比べて、主觀と客觀とは全く分離し未來の爲に現在の苦痛を忍ぶのみならず、其の苦痛を忍ぶことが却つて彼等の興味を喚起するに至るのである。殊に體力の發達著しく手の起興力や握力や腕力などが進歩するばかりでなく、これ等の運動に正確の度を加へ、

漸次筋肉運動を調節して調和的發達を來す時期となるのである。

尙製作の動機を見るに、前の時期に比べて自己及他人の爲に造らんとする實用的慾求の念が一段と強められてゐる。殊に前期に比べて仕事の内容に對する得意、不得意の別が顯著となり、總てに個人的色彩が加り、多くは各自の得意の仕事即ち狭き範圍に深く通じる傾向を示し、單に一物を造るにも自己の満足、不満足を念頭に置いて絶へず氣にする風がある。此の時期は技能の點より見て、各自生涯の幸不幸の岐れる重要な時期で、實業を好み、且つ之を尙び進んで得意とする特殊の業に入らんとする念慮を起す時である。又科學と美術とが如何に人生に利用せられつゝあるか、如何に價値あるかを自得せしむるに最も好適せる時期で、従つて技能の發達も此の時期の終りを以て最高に達するのである。

以上は極めて大體に就ての區分であつて、各部分の詳細に就ては未だ盡さない點が頗る多いこと、思ふ。要するに兒童の製作は、構成的遊戲から始められ、續いて興味あるものを單に長者の爲す所に倣つて具體的に表はす模倣的發表時代に進み、更に實物

や示範を模倣せんことに専心する寫實的發表時代や、自然そのものゝみに満足せずして、各自の趣味的潤色を發表の上に試みる趣味的發表時代に至るのである。

是等の間における製作の態度や、興味を中心の變化も、始めは單に造るものよりも寧ろ其の人に興味を有しその人の爲す所を見て行ふ位の時代であるが、漸次長者の示す模範や實物に似よらせん事を眞面目に勉める時で、實物通りに出來上るといふ點から自己の實力を自覺して其の進歩に興味を感じ、盛に自己の日用品や、遊戯用品の製作に専心するのである。更に第三期に入つては、單に示範を模倣することのみに満足せず、其處に個人的色彩や趣味的色彩が濃厚となつて來るので、製品の興味も自己の日用品竝に他人へ供する實用品、其他、贈與品等の製作に熱注するやうになつて、未來の爲に現在の苦痛を忍ぶことに却つて興味を感じるやうに進んで來るのである。

尙之を一般技能上から觀察すると初めは手指の時代ともいふべきで、紙を裂くにも木を切るにも土を掘るにもすべて直接に手を以てするので、手は唯一の工具である。進んで漸次發達するに伴ひ仕事を爲

すにも自から眞摯なる趣が現はれ、その活動も單に手指のみにて満足せず、之を補ふ所の道具即ち體力の補助機關を要することゝなる。されば小刀、鋏等の工具が如何に彼等の興味をそゝるかは大人の想像の及ばぬ所である。又槓杆、彈條等の效力を識り、弓矢、竹馬、投石等に就ての興味も頗る深いものである。

要するにこの時期は人類の實業的活動の象徴たる工具の適當なる使用竝に工作の順序を窺ひ知るべき好適の時であるから、技能的教授上最も意味深き時であるといはねばならぬ。

更に進んで來ると以前の如き遊戯的の氣持は、その影をひそめ、仕事の形式とか方法とかについての考が餘程組織的になつて來るので仕事の技巧に力を向ける様になる、この傾向は幼稚園小學校等で課する手技竝に手工等に就て考慮を要する點が尠くないことゝ思ふ。

以上は兒童の傾向に依つて極大體の經過を記述したにすぎないのである、隨つて各種の階段も劃然とした區別が常にあるわけではないことは勿論である、何れ之れに關する生理的方面的考察や、實際教授上より得たる統計的結果に就ては追つて發表することゝし今回は之れで擱筆する。